

普通なら分析化学者が居ない環境



片 野 肇

筆者は長らく地方の小さな大学の農学系学部で働いている。キャンパス内で理系学部は当学部だけで、しかも一学科しかない。本会正会員には、そのような環境にない方が圧倒的に多いであろう。職場に不満がないわけではないのだが、それは置いておいて、このような、普通なら分析化学の研究室など無いような環境が分析化学者の居場所としてどうかということを記してみたい。

まず、教育面であるが、農学系学部といっても化学系の講義を開講する必要があり、化学系の教員を必要とする。ちゃんと調べてはいないが、通常はおそらく有機化学を専門とする教官を雇っているのだろう。我々は、分析化学という学問の性質上、有機・無機を問わず、また物理化学を含め広範囲に化学の知識を有し、それを教育に活かせることができる。なお、教育うんぬんよりも、入試問題の作問を例に挙げたほうが我々の有難味を感じていただけるであろう。

次に研究面であるが、農学系学部となれば天然物の分析と単離精製が盛んに行われる。HPLCをはじめとして装置に頼れば済む場合もあるが、我々が頼られる分析対象もある。例えば、酵素（および阻害剤）・微生物のスクリーニングは通常マイクロプレートを用いた生成物の比色分析により行う。個々の対象について定法が無いわけではないが、目的に叶わない場合が多々ある。スクリーニング法無しにして仕事が進む訳がない。さて、比色分析法を構築するとなると、溶液内平衡に関する深い知識を必要とする。よって、我々と組めば、それまで検出できなかったものが目的に叶う感度・選択性で検出できるようになる。また、天然物の単離精製、いわゆる“物取り”も大きなウエイトを占める。従来のカラム精製などでは膨大な時間を浪費する。我々と組めば簡易迅速な方法が作れたりする。なお、筆者の経験によれば、そのような共同研究は両者が同じ建物に居ないと難しい。ゆえに、分析化学屋を雇い、その協力が得られれば、生物屋の仕事は格段に進む。彼らは、こちらが要求しなくとも、分析化学は大事と言ってくれる。

また、地方大学であれば特に産学連携が望まれる。農学系となるとお付き合いできる業種は少ないが、分析化学はものづくり一般で必要とされるため、より多くの企業と付き合える。

規模の大きな大学・学部でなければ、理科系教員の絶対数は少なく、化学系教官の定員枠も少なからう。そうした教育・研究機関では分析化学屋を雇うとパフォーマンスが高まると期待できる。本稿の趣旨は、そうした所にも分析化学者のポストを増やせないだろうかとの問いかけであるが、では、どうやって宣伝すれば良いだろうか。外部に対してのアピールとなるとこれまた難しい。いずれにせよ筆者一人でできることは少ない。本稿の趣旨に興味を持たれた方は、本学会行事の際など一声おかけいただければ幸いである。

(Hajime KATANO, 福井県立大学生物資源学部, 日本分析化学会中部支部長)